

2022年4月7日
NHK広報局

4月会長定例記者会見

Q.新年度にあたって。

A.(前田会長)中期経営計画の2年目となる今年は、「NHKは変わった」と実感していただけるよう、一連の改革の成果を視聴者の皆さまの目に見える形でお示しする、「改革実感の年」と位置づけています。その象徴が新年度の番組改定です。安全・安心を支え、多様で質の高いコンテンツを合理的なコストでお届けできるよう、10のジャンルごとに選択と集中を行いました。新番組や放送時間の変更などによって、地上波は合わせて42%の番組を入れ替えました。1週間を通してご覧いただければ、変化を実感していただけると思います。視聴者の皆さまには、たくさんのご意見やご感想をお寄せいただきたいと思います。

またこの4月には、本部の大規模な組織改正を実施し、「放送総局」は、名称を「メディア総局」に変更しました。ジャンル管理を徹底するとともに、放送、デジタル、それにイベントなどリアルな場でのサービスも含めた総合的な戦略機能を強化します。また、「営業局」は廃止して、新たに「視聴者局」を設置しました。「訪問によらない営業」への業務モデルの転換を推進するとともに、視聴者の皆さまの意向等を組織全体に循環させ、番組制作にも反映させます。さらに、地域の特性に合わせた、視聴者本位のコンテンツの発信を強化するため、地域放送局も、組織を役割・機能別に順次再編してまいります。今後も「スリムで強靱なNHK」「新しいNHKらしさ」の実現に向けた取り組みを強化し、抜本的な改革を着実に実行します。そして最終的には、成果を受信料の値下げという形で視聴者の皆さまに還元いたします。今年の秋には、値下げの具体的な内容をお示ししたいと考えています。

Q.これまでの編成局や制作局の役割はどの組織が新たに担うのか。

A.(会長)編成局の機能は再編しました。放送、デジタル、リアルを通じた総合的な戦略を担うメディア総局のヘッドクォーター機能として、メディア戦略本部を設置します。メディア戦略本部は、ジャンル管理を徹底して、重複する内容の番組を整理・削減し見直すとともに、視聴者のニーズを捉えて将来性のある領域に重点投資する組織になります。

A.(担当者)補足ですが、制作局の機能を担うのは第1制作センターから第3制作センターという組織で、ここで具体的なコンテンツの制作を

行うこととなります。メディア戦略本部はジャンル管理を行います、ここはいわば管理機能で、実際にコンテンツを作るのは第1制作センターから第3制作センターです。

Q. 営業局の機能はどこに移るのか。

A. (会長) 視聴者局です。

Q. 広報局の位置づけは。

A. (会長) 広報局は今までと違ってコーポレート機能の中に入り、組織全体の広報機能を担うこととなります。

Q. 改めてメディア戦略本部などの狙いは。

A. (正籬副会長) これまで制作局や編成局に分かれていたが、視聴者のニーズをきちんと把握し、公共メディアとしてやるべき戦略機能を明確に位置づけようということで、ヘッドクォーター機能の強化に向けてメディア戦略本部を作ったということです。ジャンル管理も含め、その戦略のもとで具体的に番組制作やデジタル展開、視聴者リレーションなど具体的な活動を行います。重複を避け、スリムで強靱な体制にして、適正なコストで効果を見出していくために、こういう大きな改革をしたということです。

Q. 報道局の扱いについては。

A. (副会長) メディア戦略本部は、報道も含めて、全体のヘッドクォーター機能という役割を果たします。報道局も、特にコンテンツにどれだけのお金をかけていくのかといった大きな戦略は、メディア戦略本部で検討していきます。メディア戦略本部は、メディア総局の放送分野のすべてのヘッドクォーター機能を担うという位置づけです。

Q. 番組制作を統括するのはメディア総局長の役割か。

A. (副会長) それぞれ担当の役員はいますが、メディア総局長は私ですので、最終的には全体の責任は私が取ることとなります。

Q. なぜ「NHK が変わった」と感じてもらう必要があるのか。

A. (会長) 私は民間から来ましたが、やはり民放と NHK による二元体制が良いと思いました。NHK と民放は立ち位置が違いますので、NHK が民放の真似をしたり、民放と同じように視聴率を競うというのではなく、それぞれの良さを発揮すれば良いという意味で、視聴率だけにこだわらず、ジャンル別の編成に変え、量と質、それに制作コストの3つを合わせて番組を評価する仕組みに変えました。結果、NHK らしいのか、民放と同じだと言われるのか、視聴者の皆さまにご判断いただくしかないと思っています。ジャンルを10に分けましたが、そのジ

ジャンルにふさわしい番組の作り方を工夫しないといけませんし、公共メディアとしてのエッジを立てることを、より鮮明に打ち出したということです。今まではどうしても視聴率を上げることに一生懸命になっていましたが、やはりクオリティーにもこだわりたい。視聴率が悪くても良いと言っているわけではありませんが、科学番組や教育番組は視聴率は高くはないのですが、多くの方からニーズがありますし、NHKしかやってない部分もあるので、そういう部分は大事にしていきます。そして合理的なコストで番組を作るためには、工程をきちんと管理するなどの工夫をしないといけません。そういうなかで出来上がったのが新しい番組ですので、そういう観点で見たいと思います。今回も「ガッテン!」に代わる「あしたが変わるトリセツショー」は、ある意味で後継番組ですが、同じようなことをやったら評判を落とすと思います。皆さまに見ていただいて、率直な感想、面白くなかったら面白くないと言っていたきたいと思います。我々はそれを受けて、より良い番組にしていきたいと思っています。

Q. 視聴者の感想をもらいながらブラッシュアップしていくと。

A. (会長) 要するに自己中心的な番組を作ってはいけないということです。視聴者の方から評価されて初めて番組は成り立つので、その基本スタンスははっきりさせておきたいと思っています。視聴率だけではなく、クオリティーにもこだわります、ということです。

Q. 大型プロジェクトについて。

A. (会長) 今年度は、番組の編成を大きく変えただけでなく、放送やWEB、イベントなどを連動させた大型プロジェクトを、年間を通して展開していきます。特に、子どもたちをはじめ、誰もが良い未来を享受することをめざしたプロジェクトを予定しています。その一環として、5月、「君の声が聴きたい」プロジェクトを展開します。子どもや若者の声に徹底的に耳を傾け、若い世代の幸せについてさまざまな番組を通して考えます。また5月には、「沖縄本土復帰50年」に合わせ、プロジェクトを実施します。ドキュメンタリーや歌番組などさまざまな番組で沖縄を特集するほか、イベントやWEBとも連動して展開していきます。6月以降も公共メディアならではのテーマを取り上げてまいります。

Q. インターネット活用業務の社会実証について。

A. (会長) NHKは、今月から、テレビを全く、あるいはほとんど見ない

方々を中心に社会実証を実施します。世代を問わず多くの方がスマホやパソコンで情報を得る時代に、公共メディアとして番組や情報をインターネットでお届けする意義や役割、多様化する視聴者ニーズなどについて、数回に分けて検証していきます。皆さまに、いつでもどこでも、命と暮らしを守り、正確、公平公正で信頼できる情報や、多角的な視点からの深みのあるコンテンツをお届けし、情報の社会的基盤としての役割をこれまで以上に果たす「新しいNHK」につなげていくことを目指します。インターネット上では信頼性のはっきりしない大量の情報が飛び交っています。フェイクニュースやフィルターバブルなどの問題も指摘されています。人と人とのつながりが薄れることによる個人の孤立、社会の基本的な情報が共有されにくくなることによる分断の拡大も懸念されています。社会実証では、こうした課題に向き合うとともに、正確、公平公正で、豊かで信頼できる情報をお届けし、生活の安全や豊かさ、地域社会の発展などに貢献するという、これまで主に放送で果たしてきた役割について、インターネットを通じてどのように果たせるのかを検証します。第一期は、テレビを持っていない方々や日常的に利用されていない方々など、あわせて約3000人を対象に、4月22日から5月7日まで実施する予定です。第一期の今回は、放送の同時配信、大規模災害発生時の速報や緊急ニュースの提供といった、これまでのNHKの放送・インターネットのコンテンツを組み合わせでお伝えするのに加え、放送と通信の融合の時代にNHKに期待される役割、機能を「正しく理解が深まり、気付く」「知識が広がり、つながる」「簡単に、必要な情報が見つかる」の3つとして、これらの役割について7つの具体的なサービスを示して実証する予定です。第一期では、期待される役割、機能を検証することを主な目的とし、UIやUXなど、使い勝手の面については、第二期以降に検証していく予定です。また、第一期の調査や分析の結果については、できるだけ早く、ホームページの「NHKのインターネット活用業務について」に掲載するなど、広く公表して、関係者とも共有いたします。第二期以降については、実証の項目などを検討したうえで、実施時期や内容が決まり次第、ホームページなどで公表します。

A.(松坂専務理事)会長から説明したように、社会実証の第一期は7つのサービスで実施しますが、その内容について簡単にご説明します。まず、ご留意いただきたいのは、この7つのサービスは、一つのサイトやアプリにすべてが盛り込まれているということではなく、専用のサイト

やアプリをお使いいただくもの、専用のサイトで利用イメージをお示しするものなど、いくつか別々のサイトなどから提供するということです。1つ目が、国民生活に深く関わる主要ニュースについて、NHKの豊富なアーカイブ映像、海外や地域の情報などを組み合わせ、多角的な視点を提示するサービスです。専用のサイトとアプリで提供します。次に、ネットで話題となったテーマについて、NHKの幅広いジャンルのコンテンツを組み合わせ提示し、多角的な視点から、楽しみながらの学びや共感につなげるサービスです。専用のサイトとアプリで提供します。3つ目が、ネットで急速に拡散するニュースについて、SNSでの広がり状況を分析して信頼性に注意を促し、フェイクニュース等の可能性について、ネットの利用者が気づく力を養うことができる機能です。専用のサイトで利用イメージを提供します。これは、東京大学大学院の鳥海不二夫教授と、ベンチャーのTDAI Lab と NHK の共同研究です。4つ目が、災害報道内容を地図上に蓄積して可視化することで、実際に発生しているとみられる被害の推定や判断材料を提供し、防災・減災の行動に役立ててもらえる機能です。専用のサイトで利用イメージを提供します。こちらは、千葉大学大学院の中田孝明教授とベンチャーのSmart119、NHK の共同研究です。5つ目は、ニュースに関連して、様々な統計データなどについて都道府県ごとの違いを地図上などに示し、地域ごとの特性と全国的な多様性を視覚的に把握できるようにする機能です。専用のサイトで利用イメージを提供します。6つ目は、最新のニュース映像をいつでも一覧で見ることができるようにするとともに、重要度や新着順などで優先順位をつけながら、24時間、最新情報をご覧いただける機能です。専用のサイトで利用イメージを提供します。7つ目は、スマホの位置情報と、NHKが豊富に保有する、地域の動画やアーカイブ映像を連携させることで、日本各地の風土や多様性を提示し、体感できるような機能です。こちらは専用のサイトで利用イメージの動画を提供します。このように、社会実証の第一期では、専用のサイトやアプリで実際のサービスに近い感覚で使っていただいて検証するものと、専用のサイトで利用イメージや動画をお示しして検証するものをあわせて、実施いたします。なお3000人の方が1から7まで全部の実証に参加するわけではありません。1と2に参加される方が15

00人、3以降はそれぞれ300人×5であわせて1500人を予定しており、合計で3000人となっています。期間も4月22日から5月7日ですが、それぞれのサービスによって期間を一部違えながら提供することになっています。

Q.「ネット受信料の布石ではないか」、「受信料を支払っている人には不公平感がある」といった指摘もあるが。

A.(会長)あくまで実証であり、実態を知らないと施策が出せませんので、まず実態を知ろうということです。テレビを見ない方がどういう手段で情報を入手してるのかを調べないとどうにもならないと思いますので、そこが先です。ご指摘のように「何かをやるためにこれをやる」というものではありません。特定の意図を持っているわけではありません。

Q.ユニバーサルデザインについて。

A.(会長)続いて、ニュースや番組の情報をあまねく伝えるための、新たな取り組みについてです。NHKは、子どもからお年寄り、目や耳に障害のある方など、すべての視聴者にわかりやすく情報をお届けするため、ユニバーサルサービスを拡充してきました。新年度は、この取り組みをさらに進めます。これまで一部の番組で、画面の文字や図にユニバーサルデザインを導入していましたが、これを大幅に拡充し、「ニュース7」など、総合テレビのほぼすべてのニュース番組がユニバーサルデザイン対応になりました。具体的には、画面に表示する文字を読みやすい書体にするほか、特定の色を見分けにくいと感じる方にも、わかりやすい色彩を採用しています。すべての人に、わかりやすく、また命を守るための情報を確実に届けるため、取り組んでまいります。詳細は担当からご説明します。

A.(担当者)今回導入したユニバーサルデザインフォント＝UDフォントは、線の太さや濁点の位置を調整するなどして、ひとつひとつの文字がより読みやすいデザインに改良されています。例えば、カタカナの「ブ」は、一般的なフォントに比べると文字と濁点の間のスペースが広くとられています。漢字の「朝」は、横の線が太くなっています。従来フォントを使った画面と比べ、UDフォントは、文字と文字の間に空間があり、輪郭もくっきりしており、全体的に読みやすいと感じていただけたと思います。次は色についてです。実は色の見え方は、人によって

異なります。赤と緑が同じような色に見えるなど、特定の色を見分けにくいと感じる方もいます。4月からは、配色とコントラストをより意識し、見分けやすい画面デザインに変更しました。テレビ画面の文字や図の「見分けやすさ」や「印象」は、見る側の様々な条件、環境によって異なります。どのような時にも情報を正確に、わかりやすく伝えられるよう、ユニバーサルデザインを拡充していきたいと考えています。私たちの取り組みが、社会にユニバーサルデザインを普及させる後押しになれば幸いです。

Q. ウクライナに関する報道について、課題はあるか。

A.(会長)ウクライナに関しては、突然侵攻が始まり、NHKも副会長のもとに特別な体制を組んで日々対応しています。現地取材を含め、非常に厳しい状況ですが、職員の安全を考えながら、正確でふさわしい情報を発信できるように努力しています。いまだに停戦になっていないので、緊張した状態が続いているものと考えています。

Q.NHK 予算の承認について全会一致とはならなかったが、所感は。

A.(会長)予算案は承認されました。全会一致でなかったことについては、それぞれの党の思いがあるのだと思います。

Q. 総合テレビで2月21日午後3時の定時ニュースが放送されなかったトラブルについて、原因の調査状況は。

A.(会長)システムの部分でソフトにバグがあり、結果としてああいう事態になったということです。

Q. 大阪放送局でバックアップできなかったのか。

A.(会長)大阪放送局でバックアップするというのは全く別の話です。普通の状態ですと、システムに何かがあれば、バックアップシステムがあるので、大阪放送局でバックアップするような問題ではありません。

A.(担当者)渋谷の放送センターにあるニュースを送出する設備の一部の機器の故障であり、その原因は、先ほど会長から説明した通り、ソフトウェアの不具合が一部にあったということです。それ以外の障害は発生していません。

Q.「カムカムエヴリバディ」がクライマックスを迎えることについて。

A.(会長)どうなるかと気をもみながら毎回見ています。昨日で終わっ

たのかなと思ったらもう1日あるということで、最後にどうなるのか私にもわかりません。ただ、どういう形にしても明日で一つの区切りになるということです。100年近くをドラマ化したので、昔の時代を歴史的に振り返るドラマになったと思います。ラジオから始まってテレビの時代に入り、ドラマの中にまたドラマが入っていたりしましたが、私は自分の年齢も考えながら、「ああ昔はこうだった」と思い出しながら見ていました。最初は、おばあさん役の方が森山良子さんだとはわかりませんでした。冷静に考えたら、最初のヒロインの方がおばあさんになったらすぐに分かってしまうので変えたということだと思います。

Q. BS1スペシャルに関して、河瀬直美さんが記者会見で「信じがたいことで残念」といった発言をしているが、受け止めは。

A.(会長)誠に申し訳ないと思っています。この問題で価値を少しでも損なったということであれば、本当に申し訳ないということです。

Q.インターネットの同時配信を民放が一斉に開始することについて。

A.(会長)サービスが良くなるのは良いことだと思っています。

Q.ドラマに出演予定だった木下ほうか氏の降板について。

A.(担当者)木下ほうか氏については、所属していた事務所から契約解消の報告とドラマ降板の申し出があり、これに従って対応しました。

A.(会長)大変残念なことだと思います。所属の事務所から発表がありましたので、私どもとしてそういう対応をしたということです。

(以上)